

佳月勢綱（かづきせつな）は夢を見ていた。

いつもの放課後、いつもの部室。旧校舎一階の突き当たりにあるその部室は、教室をそのまま使っていて、一角に宿直室を思わせる畳が敷かれている。後ろの黒板側にはタワーケースのデスクトップパソコンと液晶モニターが何台も設置されていて、異質な空気を放っていた。

中央のモニター前の仰々しい高級デスクチェアに、一人の女子高生が座って、黙々とキーボードを叩いている。その高速の打鍵と、右手でトラックボールを動かす慣れた手つきは、後ろから見てただけでつい感嘆の声を上げてしまいそうになるほどだ。

日笠聖石（ひがさひじり）はどんな時でもすまし顔で作業をしている。それは今日も変わらない。

と、そこで勢綱は気づいた。

自分より頭一つ小さい座高。木製の床に照り返された日光を受けた、ふんわりとした緩いウエーブのかかった淡い黒髪。濃紺の制服ブレザーに合わない、だぼだぼな白衣。

背後から見た姿は全く変わらないのに、普段とどこか受ける印象が違う。

顎に手を当てて勢綱はしばらく考えこむと、部室内を見回す。

窓際に設置された大きめのソファの上では、どこかのマスコットキャラのぬいぐるみクッションに入鹿（いるか）部長が頭を埋めて、うにゃーごろごろと猫などで声を上げていた。

男性の勢綱よりも高いぐらいの背丈なのに、優雅な黒髪をソファの上に投げ出して猫のように惰眠を貪っている。寝る子は育つとはよく言ったものだ、勢綱は思った。

廊下側、ソファと対面に位置する畳の上では、砥水流河（とみずりゅうが）が靴下のまま寝転んで、小さめのタブレットとにらめっこして楽しそうに笑っている。

毎度のようにだらけた格好で、胸元が見えるくらいYシャツのボタンを外していて、軽い茶色のセットされた髪と相成ってまるでイケメンホストのよう。

それなのに手元の画面にはアニメ顔のモデリングをした3Dの美少女が映っていて、女の子がリアクションを取るたびに顔が緩む。最近流行りのブラウザゲームらしい。そのギャップがひどく残念なところが唯一無二の我が親友だと、勢綱はため息を吐くのだった。

部室内にはいつもの四人。いつもの変わらない日常。

なのにこれが夢だと自覚できる違和感があった。好き勝手にくつろぐその二人は置いておいて、モニターに向き合っている彼女の印象がどうにも違う。

勢綱は違和感の真相を確かめようと、恐る恐る日笠聖石に近づいて、横顔を覗き込んだ。

ややあどけない顔立ちはまだ少女と呼べそうで、リップが少し乗った薄い唇。栗色の丸い目は画面の光を反射していて、トレードマークの上フレームの赤い眼鏡もいつも通りだ。

おや？ とそこで勢綱は身を乗り出す。左眉の上部分で留めているワッペンがない。

日笠さんは毎日違うワッペンをつけているのに、と勢綱は彼女の肩に視線を動かす。垂れ下がる両サイドの髪にもつけているはずの髪留めも見当たらなかった。

そのままさらに視線を落として、やや膨らんだブレザーの胸元も確認する。うん、安心安定の手のひらサイズだ、と頷く。あそこで昼寝している入鹿先輩みたいに、メロンでも入っているんじゃないかと思わせるほど、巨大な胸でもない。

そんな失礼な事を思いながら、勢綱はもう一度彼女の顔を確認して、そこで気づいた。ちようど眉間の上、おでこの部分にかわいらしいワニの髪留めをつけている。

勢綱もよく見覚えがあるものだ。しかし、冷静沈着がモットーの日笠聖石の性格には似ても似つかない。なのにその幼い感じの髪留めが妙にしっくりと来て、勢綱は口を開けて見惚れてしまっていた。

教室の開放された窓から差しこむ陽の光が、彼女の横顔を照らす。まるで時が止まったようなその光景を眺めている勢綱の姿に気づいて、日笠はキーボードを叩く手を止めた。

自分の心臓が高鳴る音を聞きながら固まっている勢綱に、日笠聖石はゆっくりと迫る。

「佳月くん……」

その次の言葉を、はやる気持ちを抑えながら待つ勢綱。

一瞬とも永遠とも思わせる時間が過ぎた後、ほんのりと顔を赤らめた日笠は口を開いた。

「朝、朝だよ。セツナくん起きなさい」

その調子のいい声は彼女の口から放たれたものではなく、天から突然降ってきた。

「うわわわあっ!?!」

情けない声を上げて勢綱は目を覚ました。勢いよく頭を振って、今居る場所が自分の寝室なのを確認する。そしてせっかくのいい場面を邪魔した声の主に目をやった。

「おはよう、セツナ。よく眠れた?」

その彼女は勢綱の隣で、一糸纏わぬ姿で横になっていた。彼女の顔に、目覚める直前まで夢で見ていた日笠聖石の表情がぴったりと重なる。股間のむず痒さを相手に気づかれないうようにシートを自分の体の上かけ直すと、大仰にため息を吐いてみせた。

「最悪の気分だ……せっかくいい夢見れてなのに、最高のシーンで叩き起こされた」

「もしかして、デートのお邪魔でもしちゃった? でもダメだぞ、浮気なんてしちゃあ」

凶星で勢綱は何も言い返せなかった。彼女は朝っぱらから元気はつらつで絶好調な様子だ。

低血圧で寝起きの悪い勢綱も、今日ばかりは目覚めがよかったものの、すぐに眠気が襲い掛かってくる。カーテンを開けると気持ちのいい朝の光が窓から差しこんできて、昨晚まで空を覆っていた雨雲は全て通り過ぎていたようだった。

「学校が休みなら昼まで寝ていられるんだけどなあ」

「寝ちゃダメだよ、わたしのことちゃんと愛してくれないと」

とんでもないことをさらりと saying のける彼女に、勢綱は優しく微笑み返して、顔をそばまで近づけた。吐息がかかる距離に、彼女は少し驚いて顔を赤らめる。

「ふふ、おはようのキスがまだだったね……」

先ほどの発言とは裏腹に純情な態度を見せる彼女が可愛くて、勢綱は顔にかかった髪を指で払い落とした。小さなかすれ声を上げる彼女は、上目遣いでためらいがちにOKのサインを出してくる。両目を閉じた彼女の唇に、勢綱はそつと自分の口元を近づけた。

「おはよう、リリ……」

「なにやってるのよ朝っぱらからー!!」

いざ二人の唇が重なる一歩手前で寢室の扉が豪快に開いて、甲高い少女の声が家中に響き渡った。

「なにって……自覚めのキスをだな」

「冷静に受け答えしないでよバカ兄（あに） い！ 朝遅いから様子見に来てみればなにバカなことやってんのよこのバカ」

「バカバカうるさいな……もうとっくに起きてるよ絢星（あやせ）」

うんざりした顔で、勢綱は名残惜しそうにベッドから出ると、体をうんと伸ばした。

「朝っぱらから寝ぼけてスマホの画面とチューしようとする時点で、相当のバカでしょ」

絢星と呼ばれた、パイナップル頭のポニーテールをしたセーラー服姿の少女は信じられない物を見る目つきで、苦々しく吐き捨てた。慌ててバカ兄貴の勢綱は反論する。

「待て絢星、これはタブレットだ。それにお前の視点からだそう見えるかもしれないけど、俺はリリと目覚めの愛のキスをだな……」

「だからスマホのアプリ相手に愛とか言わないでよキモい」

「リリをただのアプリ扱するなよ。大体今のご時勢、AI型アプリは医療や介護でも使われている、重要なコミュニケーションツールなんだぞ。中にはアプリ内の女の子と結婚式を挙げる人だっているって、こないだ海外のネットニュースで見たぞ」

「うわドン引き、マジドン引き」

まるで汚物を見るような目を、力説する自分の兄に容赦なく向けている。そんな妹の姿に、勢綱はよよよとベッドに体を預けた。

「相変わらずこの子は母さんに似て電子機器嫌いなんだから……」

「いいでしょ別に。あたしは兄いみたく未来に生きてないの」

まるでどこかのネットスラングみたいなのを言っただけの我が妹、と勢綱は思う。

「おはよー、アヤセちゃん」

ベッドの上のタブレットから、リリが元気よく挨拶をした。勢綱は携帯用のカバーを彼女に被せて妹の方へ画面を向ける。兄の中ではこれで彼女に服を着せた扱いになるらしい。

もちろん妹の反応は最悪で、まいった顔でおでこに手を当てていた。

「寝起きぐらい普通の目覚まし時計使おうよ兄い……」

「つれないなーアヤセちゃんは。もうお出かけの準備してるんだね」

リリに言われて絢星は少し目を丸くする。タブレットのカメラから絢星の姿を捉えて、セー

ラー服を認識しているのだ。これぐらいの状況判断は現在のアプリだと余裕で可能なんだけど、全く疎い絢星には思いがけない反応だったらしく、疑い深い目をリリに向けている。

「はいはい兄い、朝ごはんできてから早く仕度してねー。あたしはもう出るから。遅刻ばかりしていると、またうちに先生から電話かかってくるんだからね」

それだけ言うと扉も閉めずに、パタパタと足音を立てて絢星は寝室から出ていった。リリのことなんて完全に眼中にない。妹のAIアプリ毛嫌いも相当なものだと、勢綱は少し呆れた。

「相変わらずアヤセちゃんはわたしに厳しいねー」

「んー、別にリリが悪いわけじゃないよ。気にする必要ないって」

「……そうだね、慰めてくれてありがとうと、セツナ」

リリがタブレットの向こうではにかむ。

この反応もプログラムされたAIが最適解を行っているだけなのだ、と冷めた意識で見ることがもできる。しかし相手がどう考えているかを推察するのは人間だろうがAIだろうが特に変わらない、違うのは自分の意識の持ちようなだけだと、勢綱は自然に考えている。

「じゃあ、ちよつと朝ごはん食べてくる。リリも出かける準備しといて」

「はい」

後腐れなく元氣よく返事すると、リリはタブレットの画面から姿を消した。それを確認して勢綱は、自分の机の上に置いてあるスマートフォンの電源を入れる。

ロックを外すと常駐しているアプリが立ち上がって、程なくして転送した制服姿のリリが画面上に姿を現した。画面を鏡に見立てて髪を整えたり、上目遣いに覗きこんだりしている。

左右の後頭部で髪をまとめるリリ特有のパーツをつけた後、眉間の上辺りで前髪を髪留めで揃える。夢の中にも出てきた、薄緑色をしたワニの髪留めだ。

仕度ができてリリは満足そうに、両手の人差し指を唇の端に当てて笑顔を作る。

そんなリリのお茶目な姿を微笑ましく眺めて、勢綱はリビングに朝食を摂りに行った。